



語林類葉

九

威洲縑

ホ 2
398
9



2
398
9



語林類葉卷之十七

清々濱臣輯

めの部

一言

め 女ノ名ノ下ニツケイフ通称也

後撰雜一志笑のけりさきめても〜人の志
もつゝにみるといふゆりなり云 黒主

何程んに應じ此もあはれいんかきつとかつくみあして
○此奇女名ノミル如ニ古今他者白女同人と
西松ヲヨセテヨメリ○大和物
に語 志とあり○大安寺奴婢帳○続記

め

成衰記十八去ハ龍王メク片申侍ル也。同 同 弟八
外海ノ小龍メラ四大海水ノ八大龍五ニ仰付
テナク成ヘシトテ嘆リケル。同 同 梶取メラヲ
スカシ負セタリ。同 廿九ツノ信救メイカニ
モシテ打殺セヨ。

ヨメ
ミラメ

某眼
万一

鶯の春のめし 夷日山霞をぬれく 東目みま

タ、ラメ
メツ、ラ
ヒカメ
ウチツケメ
ソハメ
ヨコメ

○竹取 湯目ハキ目めテ如し夕りの和名眼 タ、ラメ○
字鏡財メマラカニス ○棠花 花山 目つらのなる小法師めて
ぬまりの今昔廿六十八若三解目ニヤト思ヒテ。源
浮舟 うちつけ巻のと猶うぬかち一きめ。同 同
そは同ぬえとわし多して。漢雲 三夜目とさる。とめて
似つうハ一りり。同 世をむむき、のんまじる。極の
ら程をふ免せしとるうさしけぬき。のをハ。さ
捨多ふめ。さきと浅や。〇同 三を
とむむき。い。ゆ。に。さ。い。や。り。ま。を。あ。ぬ。あ。り。さ。い。
ぬ。〇増鏡十。ゆ。れ。〇〇。わ。て。さ。い。は。ま。り。わ。と。お。ほ。

くし書に月林寺に云とる験あり
刀に飯をせせり

めは 着

志のい祿下 志に免くまゝあやの清を○

めぢ

和泉武部集

あじきとあらしのまめれい心やあけ月とふしは

散木

夫木止一

続古雜下 後朝臣

とくいなまをいれもいこくまてまの竹莖あちけい

三言

めかま

詞秋 道余法師

○ 今年又咲へき花のあらハを福ふ菊子免これをもせあ

めくむ

林葉一 逢樵夫回花

○ 咲さるはさあをいふも山人を老くん枝をとりまてこれ

免くじ菜

海人藻菘云毎日三度の供御ハ御免より七種沖汁
二種之御飯ハまうらう強飯を喰へる也。○
マハリト云ニ同シ ○
メリリハ今菜ヲ

免七

字鏡髻 小兒髮目佐志 又髻 目佐志 ○狭衣三枵十一免

ゆいぬる湯々しとせちゆかきやむじり 三ツの志の
玉祢下 ゆきしハぬきしに おいて多の毛ぬき ゆきし ありあむ
やうみ。○催馬樂 朝倉裏書哥 安佐又良也。

乎女能美那止仁。安比支世留。多万乃女佐之仁。
安比支安比仁計利。○同行河 二段 波名曾乃尔。
和礼乎波々名天也。和礼乎波々奈天也女元

之太久戸天

夫本世四 人 とてん

中ニ 或物語云 さいの國のあぐさ 此後乃貝ひらふ あぐさ 此 あぐさ し れ ね れ り と せ

○

免々

源 菘 美 つくまの おろひ だもの を し き 免 を ぬ も ○河

花机覆 緋文紗目漆也。巴抄とくを漆へかゝるべ
如し織物よてハれし

めづけ

続詞戯 咲くくはのふ南のきりきり人のもとよりめ
つけとつをのこれちとおりのころをえらめておろし
といへるるゆ 并 乳母

いさなりやうものちきいふはしやういふはうおまへん

○庭訓

めぬき カノ目貫

○ ちるのねのめぬきのきちとすけをわてのねのねとねとちるのねと

めぬし 目結

嚴鳴詣記 よめしうめあひと おつふもつとをえて
散木雜上

○ 山家下 君といふゆゑにうらむるにうらむるきけ免結をうらむるにうらむるしうし

四言

名物

産衣ノ鎧成表記十六 ○膏食ノ太刀同 ○雷上ノ
 勤ノ弓同 ○水破兵破ノ矢同 ○獅子王ノ
 釵同 ○唐皮ノ鎧同 ○小鳥ノ太刀同
 同 ○八龍ノ甲同 ○

免いなく 面目ノ音便

○源々々

○同真木柱

○栄花花山廿七 所ぬいほくもめて多くと

免うつり

隆信集下 免うつり 此字の免福りぬらるもいぬあやめあひ

免ひくく 屋根ノ一也

今物語 雪のふとむるもさなる不膽西上又の家を
 ふきしなるを三三ぬ雑色を使ひてし一甲の履をも
 免かきく一ぬふけと以もせとぬ云云

免くあけ

○大和物語 さゆらぎ地もさきとけ成る道とあそびの
里多してうらみありあけふふ ○後撰喜下延長清
時殿上のをれおとすの中お終りあけらばて○統
後難上老の後よりして召出されて云○

免しうと 河海召人の妻こ

源真木 ゆかりしうとたてつうまのりおきしあふこく
のきこ中將のおもとあふ ○大和物語かこの女しうとあ
きこめ ありらる ○栄花 むらさきのちうふおほんしあふの

内侍れもけのおおる年日月ゆきしあふふんの北方ゆて
○述土日記小野まの清後しうと ○うね保ししう
おろくの河終りしうとあつ免さつうはせまひをれも
○書記 有客人生男女四人○

免しつぎ

免しつぎ つぎ
竹取をり舍人二人あしつぎあてて○栄花 お花
○源真木 免しつぎ 舍人れあふのあひさうりういし
あていあめしあふんあける ○花 李部王記天曆
二年十一月廿二日丁卯夜詣右兼相坊門家聚

公中女中畧 召継以下錢二万〇同 西宮抄院宮
雜事中御隨 身勤夜行召継奏云 今案
親王家又有召継式部卿重明親王嫁之
昭召継以下錢二分を録に云 上記
李部王云 〇

免とつる

今死スルヲ子ムルト云ニ同シ

愚管抄四 今の世ハ君の清眼云 〇同 法皇の清眼云 〇
いふ云 〇同 法皇の清眼云 〇
まゝ〇

免云 やき 目明

阿佛轉寢 云 〇

面形カタ

今昔ハ八世五 舞人ハ多好茂也 面形ヲ取去テハ
人モ見知ト思ケレハ面形ヲ為云 〇

免云 〇 面々

中勢内侍日記 御多云 〇

目口くちをあらうて キモヲツクル人サシ

今昔十九十八 女房達寄異ニ目口ハダカリテ思ユル

了限ナシ ○同世八十二 僧共此レヲ見テ目口ダ□□

テ皆立去ニケリ ○同世八世 奇異リ目口開

テ居タリ ○源サ女宮けさうくろろろ清うほの

迄きくく清目おなまにありぬ ○あらまほ三十五 目オも

口もあらうぬ

目の上にさうく

今昔廿六十八 郎等共手毎ニ取テ目ノ上ニ捧ツハ

持来テ○

免もあらまにあらま

栄花花山

目をうち叩て

今昔廿七五 可死氣ナル縛リ被付テ目ヲ打叩テ

有リ○

免とりぐるまのりきぬ

大和^{六十}八^十 馬のりれむけぬ免とりぐるまのりきぬ
うちきぬされと屋にありぬ。

十三言

あかしを入るるとして摩

宇治大納言物語 流石よて免にちりの入るとして

は里まふ。○ 派とマキラス
サマナリ

めをとりたにせしいつをり

源系やをふかかどけき物たの人れてうとくふまうり
ハ多とりあつ免くけくは急いぐ免をとりイフ
いつをりめて キ調度イフ

もの部

二言

しぎ 裳着

落窪世八

むめ忍十三めで清もきなるる。源 葵

○小右記長保二年十一月三、来七日伊勢

斎王着裳

年十七

○栄花のやくまつおほと

姫君十二ぬれもをえいどしれうちふもききて○後拾
別人のおさふさいとくの子としぬ裳まをのり
せとぬれもをせれどし作りくまみけりて
○宇敷保 あてま十二ぬれもきけるふもきまふ。源 松夜

西遊記 百日の夜をよそひて 一條院

そやひ

夫木六 後成

久るまをふの舟おひそやひせよ 移住を地まの星よして

○

そらや

そや おとやとくに 射あふらふこと

栄花 殿上花見

くふらうハ松の日の松とありさうそらやにの代とけくひんぬ

同手合

そまづしとくそとみまを梓弓そらやわいしと嬉しうなり

嬉しまいそらやらうこハ梓弓君とくそまづしとくそらや

拾難春 順

むく人そめしとそいー梓弓つらと嬉しきまらやー(こと)

堀後百賭弓 常陸

渡しとまのあたる梓弓そらやーつとくふれー(こと)

四言

しどかー 語源ハ欲庚の意を情じてふ心の伝めぬ

拾遺ニ題エテん こと人そいん

後拾遺ニ 増基 遠江紀行にセタ

七夕をこまひかーしとそい 我ガーことそハ遠くぬた

堀後百 忠房

千照 平実重

人のうへとそいしつらふそとあしつとそいしつらふそとあしつと

○拾遺と千載同意遠江紀行堀後百と同意

千燈三 不補

とらに... 人... 袖の... 入...

後拾遺四 好太

あらし... 物や... 人... 物と

○宇... 此七とせ... 子... 難太平記

文をつく... 鈍... 難太平記

とと... 哥ノ上句下句

大和物語... 昔人... こと

とつ... 源 早... こと

をと... 枕... 人の... こと

とい... 同... こと

未... 後拾秋中 男... 伊勢物語

○神樂哥

とと... 本... 草木ノ根

源蓬生 せんさいの... 花...

とと... 自然香氣

源紅梅

とと... 君... 花... 兼浦集

とと... 梅... 兼浦集

○

ととむい

字鏡

○落くほ

○和名

○都土産

とのうき

懶。物毎ノ憂 コトニモイヘリ

公任集 女帝おほん区
花のほとと雪とと いや何しものうきあきしきなり

曾丹集
山里いたるのまらえ小吹他のおとさくゆきあひのうき
詞花冬、
外山集 詞

とのうけ

万代島 前大納言基良
さてと又いふくはるは月けゆきあひのけとあひあふ

○

ともの

物ユエノ物カラ

万六士
見候せくらき物可良のけとあひあふのけとあひあふ
坂百菊宣
林風よはるのけとあひあふのけとあひあふ

○源夕霧
とらひゆんものうきあひあふのけとあひあふ

とあひあふのけとあひあふのけとあひあふ

丁後の清を——
その清むらうとめを清むらう人よりの清のまのれ
——と清むらうやうきく清むらうの清むらう

ものふ——モノイヒサマ

新撰六帖

信実

○ついで九段人の信実の清むらうの清むらう
物しめを清むらうの源清むらうの清むらう
かきしめを清むらうの清むらうの清むらう
もい清むらうの清むらうの清むらう
れふを清むらうの清むらうの清むらう

ものふら 物裁

源野分 物の清むらうの清むらうの清むらう

ものふ

モリスキ 清産又御不例の物付ノ有源氏
ニヨリマシトイヘルニ同シ物ノケヲ付
ル心ナリ

盛衰記九新大納言父子并俊寛康頼ホカ共
トテ御物付ニ移リテ○続世継 源氏ノ息吹
きのりのうをせまぬき清むらうの清むらう
○紫日記

○禁秘抄

詞雜上

あやも草のりもくくぬゆぬはたの書戸や人のみくくん

同應下 和泉武邦

千原三 手家

やまのり

もむもう 文盲の故也

長明無名上 或人云基俊ハ俊頼をハ故此の人とて

たはつと 駒の道わくわくやとあやふたれんをい

○

をいさう

中務内侍日記紫のつしぬきれもくくわらうつ

をいさう

とつて 百傳

万葉二 百傳とある枕辞とともあやまらう

清輔集

とつての波流や杖をまゐらんやのす風袂も

万代魚一後鳥羽院

百ひての八十の鳥さるるも思ふをるのわくへちせん

丈夫六 権僧正玄朝

とつての自さるるつてのつらねの山吹乃む

俣光集

君の代の影かゝりしつての八十の浪流のまゝい

○

とろふと

夫木世六 為家

○ ちくせとやととろふとのやんをなぬき世中にさへし

とろふと 諸息

志のむね上 ともふひちりゆしる 〇源

五言

もーくさるし 文字鎖

拾遺負外十八 いろはとろふと

月詣雜下 加茂成助

とろふとのなましきさしほるん かつのもちをわごてきん

〇 続世継花のあし ときりきんうめとつふとつねに志

らうに 〇 袋草子連哥ハ本末只任意詠之雖然

至 銚連哥 突句ハ專 不可詠未句又如然之取任

口 早速 = 不可突 〇 夫木九 蟬建保二年六月文字

字鎖廿首 〇 著聞五弘微殿女御合に花吹し

ちくはゆひなとつる文字とせりを奇れ句の上にもろ

折句の奇にともをころとる 〇 夫木十八 雪文字鎖廿首

仲正集

栄花^{三月}宴 ちろひみなをけきまのくもとありま

ちろひみ

万代照五 源兼澄

同ねをさうさみゆなせ中よれをさうすいとのひよ

ちろせ川 地名ありていふ

尚齒會席 ちろせ河ぬらうさ

ちろちりり 諸桂

栄花 初花

ちろちりりニ粟ちりりも君かかあふしむらみのとを成り

後拾雜五同

後撰照二 ちろちりり

足川の山かあふちろちりりちろちりりちろちりりちろちりり

六帖やちりり

ちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりり

○契仲六帖考よちりり

ちろちりり

雨ふれあ海のちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりり

堀百斤園

ちろちりりちろちりり

新六 ちろちりりちろちりり

ちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりり

ちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりりちろちりり

とあらの小秋の新六庭櫻 信実とあらのさくら

古今 玄城ゆくとあらのの小秋落おもこ

丈夫六 後九条内大臣 山吹のともあらのをてはよなき秋も遠き秋の離に

同土 資季 院人のさきむゆへの秋風よとあらの落露をなれつ

同十五 建保二年内大臣 家長 桜のさきとあらのをてはよなき秋も遠き秋の離に

父安百首 清浦

○宗親様日記 とあらのの橋

とあらのの橋

後拾葉 好忠

柳のさきとあらののさきとあらののさきとあらののさき

壬二集 中 雪つらさきとあらの山寺道たてのさきとあらののさき

難六 光後 さいゆらさきとあらののさきとあらののさきとあらののさき

○ 雑勅秋上 定隆 雪のさきとあらののさきとあらののさきとあらののさき

ナラノハカミハ
ノキリノスキ
イナリノスキ
ノキハノカケ

とあらののさきとあらののさきとあらののさきとあらののさき

栄花 花山 十九

八言

栄花五卷山々へき佛神のほもまはるる也

語林類彙卷之十八

也行

やの部

一言

や 人ヲヨブニ名ノ下ヘツケテイフ今モシカリ

源上若菜 朝臣や侍やはと死もと絶を○又ヘツケテイフモアリ

○今昔世四五其遣戸ヨリ類ヲ差出テ耶ヤ已レ

此ク有ケルハ只未レト云ケレハ○

や 人ヲ驚声也

清久濱臣輯

棚屋
井屋
淡屋
アツリヤ
ハツヤ
樂屋

○大和物語打出の淡にちのつねのりん免てふまに
アヤとををつらう。同又間をのりぬる松皮を
のちも

同 雪のふりやうきふりぬのうら深のあきのき

某屋

万 虎ののう古屋を

○江次第一七七 又從安福殿南行東更折從棚屋

東北角南折至千永安川西掖張同慢

宝治百首 名氏
あけのけさうやのふのりまらうしめぬをひらう

夫木世五 是延法師
千多唱ふれの淡屋此あけるよふ福をう丹の歌をさしき

同七七 仲正
あけのけさうやのふのりまらうしめぬをひらう

同世山家述懐 源仲正
あけのけさうやのふのりまらうしめぬをひらう

同世三笛 仲正
右の樂屋此六両笛を合さるつみふ

同世一播 西念法師
雪原き谷のふ屋を廻りけあをさうつふ柴のふり

○契仲云植生屋を○

二言

やの 宅の家。家持

源也 屋うれまのよまみのくのまじあやうし

江橋
ツシ
山吹
橋

山 山門

古今離別 山にのぼりてきこえてきこえて
ついでみよあり 幽仙法師 ○ 山比叡山也 此頃ヨ
リ延壽庵 寺ヲ山トイ

やゝ集

拾遺 雜賀 八重江梅 ○ 沙石集 六やゝつ

しし小葉やまよこまけりむあゆむとすむかしの浦く船

やゝ後

後拾春上 和泉武敏 杖まきの命ハまけりま野ぬをこのあをえをやくとやくが
同應四 さくみ やまとのま枕の下に志ほゆれく煙もくまぬまの海が
統千雜中 宗式部 四方折海ま塩まむあゆむんくやくとみけりて款をやくむ
新拾遺二 和泉武部 志ほゆれくまゆとみけりて款をやくと塩ま
万代應三

丈夫士五家 袖の浦にまゆ屋くと塩まけて船流しつるあまこをゆれ
源頼三 塩まけるまをゆくま塩まけるまあまゆと款をやくむ
二条大貳集 以いしゆあまのつとまゆとゆれくまゆと塩まけるま

やさー優

茶花社茶 いとく〜〜〜 やさしけふあひつ
きふん〜〜散木集九月十三夜於前武衛
泉亭詠和奇序やさしきとみらあし

山家集
子張の月よらとそそみしけのやさし〜しらり
又亦二六

やさん迄

江次第拈三迄者矢佐戸。

や川浦屋軒

栄花いんげ長奇 うはひくぬまひわちらぬ馬のあやえ
くき長きあま〜にちまひ〜〜あしきか〜
よのりしも〜

や似せ 梁瀬カ

万代下統後撰 仰頼
より川海も〜せぬ夕きりちやせの浪の音ねしをす
統後拾遺二傍正行言
いさ〜〜あ〜ぬ浪才の名水川やせの浪をゆきまつ
万代二三

心魂琴詞

詞花笈 好古

川上に夕立はく〜〜〜〜〜

新古 重之

石川や水色の浪も〜〜〜〜〜

重之集 百首中

堀百霧

や流る 屋根居

為忠後百首 頼政

よやの池つ〜のや流るゆ〜〜〜

○ 今俗云
ノカ也

やふと某 罵詞

宇於保飛完 ふとれやふれ子もちのものハ〜とて

ふとちの 子もちの 〇

やゆと某

赤深集 存とし

唐國の〜〜〜〜〜

月夜 赤深

〜〜〜〜〜

後拾雜六 赤深右馬

〜〜〜〜〜

○家集 〇源女ふほとと〜〜〜

いの世に〜〜〜〜〜

云実ハ和漢の女は蜀て小野天神の西政をつき

又知聖院殿中人うらやまをいふる一むの由りての
後頼無名抄序やほとみよとのうらやまの千載序
なまるとふと云ハ○同いれも八雲のそを志
けききききしほやまこととふとのせいふめくさり
○愚管抄内大臣伊周人のうらやまをいふるうら
まの人のけりていふて詩のうらやまをいふる
まをいふる云○源相壺をいふるうらやまをいふる
うをいふるて○今昔五世善澄才ハ微妙カリケ
レ正露和魂光カリケル者ニテ此ル心切キ
事ヲ云テ死ル也○源東屋のうらやまをいふる

きこひのうらやまにふれハ云

夫木三三 仲心
我と君ありあはれやうらやまのうらやまをいふる
○大鏡ニハうらやまをいふる

うらやまをいふる源次女

統古羅喜下 侍従の家

同月

源貞紀

石上あつの中道とていふるうらやまをいふる

○長秋詠草 長寄 うらやまをいふる

とみよとのうらやまをいふる

やゆふ 病

都のつと跋あふ諸と六のじもむしめとやまふ
とゆふ一々〇水鏡中佛像をやきしつふと
けやゆふおふとア一〇流後拾雜下やゆふ
とつふいふとふと一おこしうて〇

やみ

ヤ・アシキ

続記三 宣命 多利麻比互夜々弥賜 源胡蝶
おぼとやあふんこやゆきと 河んやまききり
〇同本桂人のゆみあふはトゆ後ゆしきめ

あきとてあしゆふ〇同師法 流のそん道めも入る
やとやゆきと 見合セル心 〇同宿本 見合セル心
まーやみく久〜ありで 見合セル心 〇河良見
〇月浮舟ふらとめおとろ 見合セル心 〇河
ふやまーまこ 〇淡雲三 見合セル心 〇朶花 見合セル心
ゆるとたふとふ〜きうとき 見合セル心 やまききり
〇三代實録 四十 詔政事若壅滞 世无 世々美思
保之今本也々美三字 〇詔鋒解 一 漸見 ニテ今
元ナシ古本ニアリ 云見合ス心也又心マシキニテモヨシ

隆信集短六 さいぬぬとまてやいとれと
るに○拾友抄下未 灸治織者七日居灸之人三日
云 ○行阿假字字遣

やう

源朝貞やうくゆおふぬひをのこりまふ○同夏正
人のういおたつやうくきけと○唐鏡やう
くの勝地抄筆して○同李夫人といひきと
あやうくぬ色てぬさまふれハ○

焼石 ヤキイシ 今云温石

大鏡 時平云下保 光侍の条 六の保光大将八条中住多々内
余りまふ ちどのいとまふるのふくにいつおれしと
冬ハもち ちのいとおほきいふるをもとむのちむさき
をハニツ 焼てやきいしのやうぬおふあてぬまふり
ゆきいし

○十訓抄

○盛衰記

○畧和温石 方言要目云温石

○本州和名温石

○落くほニノ 湯

焼石あてせまふんやとやわれし 中畧湯
やき石もと絶まり多へ

焼印

逸史一引自本紀畧延暦十一年七月戊午禁桑
束、鞍橋但旧者申所司焼印用之。

焼漬ヤキツケ

今昔廿八十七 焼漬ニシテ持来又平草也。

焼物ヤキモノ

今昔廿三 今ノ妻煎物ニテモ耳シ焼物ニテモ
美キ奴ツカシト云ケレハ鹿リイ。江次第抄ニ
雉焼物一杯

やせいの 八十坂

尚齒會席 やせいのたよりてあしふふんぬら
拾遺五下 百と八十の坂よらのなれハ神の魚れ糸代をよま

やりの

行取おとくあつるやいとをゆゝとのりして
○日かや姫ふ大ぬん人のやりの。古本今昔盗人
^後張^るやりのかくつとまきと源盛とぬあわち
とつふとゆいとゆきとゆり。今昔十九世五此榻メ
タル盗人ノ奴カ。

やとせ子 ハツニナル子也

万九長分 あ乃やのふゆるととと。やとせ子の
うをぬくの時也云云○万十三年の八とせをす髪
云云○字款保

やとせ子宿守

源生此宿守のやうにてある人を○月あり
とト之月安部○夫木と二所詣下向後侍とてん
きりーこもとあ 源倉右大臣
○ 膝を打てあせやせりおれぬとてあやまるといふ

やれらひ

後撰雜四 ちね山と肉とさつとひと時あひとつわり

まゝ女花人のさき〜ゆつほやれくひあひくけよと
〜おきて〇枕冊子巻八つゝやふくひあひき〜まわ
〜んの〇西宮記云 諸衛府佐有御出取負壺
胡録〇

やむくてハ枚盤〇八開子

神武紀 通証八廿九 詳見

保憲女集
年もふハ十ち人のやむくちに〜まきれりうれ〜
夫不七 行家
神山の〜とみひ〜ちあ〜い〜ま〜る〜の〜月〜に〜ま〜の〜
新勅神祇 惠茶
あ〜れや〜の〜ち〜と〜や〜〜に〜た〜ん〜さ〜り〜の〜の〜

〇

やぶさか

続世継うら 白の院のやぶさかとつよとほら〜
〜ゆ〇新猿樂記

や〜

公任集中勢のちよハま菊植々〜ふみつ〜り
あやむ〜まひま〜
あ〜れ〜ゆ〜く〜る〜菊〜に〜あ〜の〜花〜の〜〜

後拾雜二 清浦集

やしののくちまのり 信おのり 山いんく くり
。袋巾子。大鏡ニ やしののり きて こと きて くり
おのり くり

山てり 山ノサツヲ

山てり。藤原のつや ちまのり ちまのり 月れも ちまのり

やほせと 山莊

漁々旁小 山てり ちまのり ちまのり ちまのり
ちまのり

山城

逸史三 引紀畧 延暦十三年十二月下丑 詔曰云
山勢實合前聞云 此国山河襟带自然作城国
新形勢可制 新号宜改山背国為山城国。

やほせと 山賊

都土産 ちまのり ちまのり ちまのり ちまのり
あやまのり ちまのり。

山伏 僧

六のちあきちせえていそしおのうら山ふり一時あふへ

○六帖 ○家集

後拾遺 とくじんきん 山伏のおりる海もふりよこるれ

○六帖 ○素性集

○増鏡 春別 資朝も山伏のゆねしりて梯の衣に

あわる笠とりふとのさくく ○源薄雲 山とくま

しき山ふりしとまき ○東鑑十三六 毎夜夢中山

卧數十人 群集千重成枕上乞件幡 ○

拾遺 山伏と野ふりも

山ふり

後撰雑一 法皇とくしりおぼんく おろりて山ふ

いしりあひひよ ○同旅 法皇とふきあふ山ふり

しりての源玉うら 山ふりしりる衣ふる人とれ

んえあてまうつけありし。

箭目負

今昔廿八一 比御社ノ御箭 目負ナニ物ヲ ○

家渡ヤロタリ

今昔七世^世 吉キ日ヲ取テ渡ケルニ例ノ家渡
ノ様ニハ无クテ酉ノ晩許ニ宰相車ニ乘テ置
一枚許ヲ持セテ其家ニ行ケリ。

やをと絶

拾遺集

○士御門通親公嚴嶋御筆記云淨神樂のやを
と絶八人

万代神祇 大中臣能宣

支本十一家集 伊勢

やをと絶の神事と云ふをいふ一君かのみしうあてしものん

○六帖四日 伊勢 ○支本世五女やをんれ け奇新六に

やをと絶とある。

五言

やうく 様々ノ音ニ。様体らーく勿体らーきまじり

長明無名抄上のゆらけ下きらむーまやうくーと人

にゆらまんととみらるるをきくと絶をー作りー○同上や

うくーくあめさうもーく○同上あれあるくあう

のちほいかにやうくーくあうまれと。

堂

やぶのうら

讃岐日記のやぶのうらと見てもさうぬるものごと
大嘗に
この屋

やぶいよ

栄花初花 油のうらをきりゆくやぶいよふよ入ふは
みまにの延喜式内近寮式年料柳筥一百六十
八合一尺六寸以
下一尺以上織筥料生絲一十二斤〇統記九元
天皇養老六年十一月丙戌云銅鏡器一百六十
八柳筥八十三〇
延喜式ニアルハ
柳行李ニ
ハ考
編

系ノ
アリ

やぶかき 義隠

三品親王
三品親王
山ヨリ帰ル柴人ヲ云
史本七四

やぶのうら 山ヨリ帰ル柴人ヲ云

高野日記
山ヨリ帰ル柴人ヲ云

やばあとり

後撰忘三男のほと久〜〜りてよてきてみあるれ
いとつきよ十二年の山あとりして久〜〜きよ
えりつ〜〜枕草子 おほすけきぬ 十二年の山麓
の法師のゆをやの続千難中前大僧正道云云動
寺に千日の山麓〜ゆ〜まのゆ〜し〜
源兼氏 後臣
い〜して〜世のうさ〜宮のゆ〜山麓に
返〜

○千釋教むえの山あとり千日の山あとりみちゆ〜こと
と○今昔十 七 比叡山ニ登テ出家シテ法花

經ヲ受ケ堵テ日夜ニ誦誦シテ十二年ヲ限テ
山ヲ出ルテ死シ○古事談三惠心僧都妹安養
尼終焉之敗者必可表會之由僧都契約云云而
僧都千日山麓之間 中畧 雖然限日數之山麓難
出洛云云○類聚國史弘仁十三年六月壬戌傳
燈大法師位最澄言支如来制戒隨機不同衆生
癸心大小亦別望天台法華宗年分度者二人於
比叡山每年春三月先帝國忌日依法華經制令
得度受戒十二箇年不聽出山四種三昧令得修
練然則一乘戒定永傳聖朝山林精進遠勸塵却

許之 又云天長八年笈四月丁丑天台之宗年
分度者受戒之後一十二年不聽出山四種三
昧令得修練之故也

山やまやや

大和物語 山やまややにおおおおひひままふふとととと。

ややほほりりととりり 即山鳥やまのとり

万代庶ニ仲実 ややままののちちととろろののふふををめめととつつふふににつつららふふははいいままややままつつまま
○家つつととりり 鶏古事けいこじのの野のつつととりり 雉同けいどうのの時ときつつととりり 郭公かくこう

散本

六言

ややままのの鶏けい

千庶ニ 雅類 山やまののちちととろろののふふををめめととつつふふににつつららふふははいいままややままつつまま

ややままのの鶏けい

林葉三 山やまののちちととろろののふふををめめととつつふふににつつららふふははいいままややままつつまま

○

やはらのとら 屋航ノ柱ニヤ

巖嶋詣記 風ふりふきくわく 舟のやはのとし
ら吹をりてくわり

やまはけうら

続詞意中。袖中八曲。○万代意三十五

やはのあはれ

古今難下とく人きん
みぐしあはれ心のあはれに宿もあはれのみまはれの時こそふせ
元帝秋書 橙智赤子曉峨后
とらふしらのあはれよま雲さかぬあはれの時なりとら

山家集上

我宿あはれのあはれよあはれよとふまはれよとせよとら
拾遺五州上三九

病のあは

拾玉智
さしやう心とれぬ是川乃病のさるる秋乃ゆきも
同礼病即消滅
法の風子杖の旁にへんまのまはれよまはれよまはれよま
○新撰朗詠 基俊更書 命露未消病霧濃霽

やみせうりて 病盛カ 病降カ

棠花梅のあ 四十六 とれ人よとらやみせうりてのりとも

ことにならうてゆらりゆらりなれとまぬをつまぐなれ
上に書く返り侍なると大和物語とてとめく女は
〜あゝ人のやんとれきあめいゝ〜まゝあゝ〜〇不得
巴とつふ事く毛詩に王事无盭とあゝおと〜お不
やけよりれ侍有るま〜ゆれれとふ不所りまの
〜あゝ〜とゆりゆりなれより物してま〜貴人
をやんとれきさるるま〜つふ貴人のまも疎畧にふ
〜あゝ〜と云心持り轉せしぬ〜は詞後撰より
前の書に足あや〜は源氏以後ゆ多くつ〜詞之旨
大の御用あ〜るゆ〜は〜を〜後乃御用〜

る下にれしをりま貴人〜と〜めきまのれまを無病
事〜は〜と〜つ〜ま〜は〜の花鳥相壺をゆん
まよら〜のふを〜つ〜位〜ま〜人の〜は〜し〜あ〜れぬ
ゆなれ〜や〜む〜と〜めき〜ま〜と〜は〜い〜り〜ま〜
撰をいりぬ
小通し い〜後
〜り〜但〜後

やを〜

今昔 阿彌陀佛 ヤヲウ〜。同世 阿彌陀佛
我ヲ殺ス有ヤヲウ〜ト音ヲ奉テ叫ヒケル
。

七言

やう免いの女

宇於保祭使 やう免いざんありかやや ○同 同 其

やう免いをわいふら ぬつちんとあや ○同 印本初秋

やうわいらくあま

上古本仲津白段

病のむしる

愚管抄三 涉病のむしる小昭宣て多り多ひて。帰

命本抄をにつまやほつたふくれ。

やほふきのさき 山吹崎 近江

蜻蛉日記 石山小幸りくくくつうつう山吹崎れと

いふ處をえや

源相摩

風ふまはゆるもさこさみくくくや石山あつ山ふまはれ

○

八言

やくのゆららう

江次弟 石清水 除取奈 螺盃銅盞近代不行抄云

古今三 其之
美富のち初めいあゝぬうら衣あもへりてあまし
六帖衣

支本十六 初冬 順徳院

新勅秋上

雅証

あひのち初めいあゝぬうら衣あもへりてあまし
○

ちの部

一言

ち

三のち松上 姫君ハ日にまへて清方をいのに入る
○源若菜 清ちばとひまのちのち六月廿日
ちときく清くしあけなる。同梨 清ちれと
も吹しあさる。○日月 清ちれとあがりなる。○日
月 清ちれとあがりなる。○陽 清ちれとあがりなる
れとあがりなる。○宿木 清ちれとあがりなる。○
ろくハきとあがりなる。○陽 清ちれとあがりなる。○

よりつきてあつて○月○日○
とをきくにあつて○同あけたまひ

○蒙を峯の月
ふりぬたりせあもあつてもれと

えいつつゆふ○同
浦々別
六ウ

○宇敷保
印本
古本
改上

○讚岐日記此も秘のふへ
ふく是ゆきと湯

ふくふく立ゆりふんとも出多しぬ○淡松四入

とあしそゆ也れとふくをふくをみい

ふくもふく

二言

あ

稜衣正涉帳のころむらあふあひあまて大あ

あ子をしかりるおろしまんを○

三言

あ

うやね志不満ともひつにあつてをてを○

十六夜日記長奇あつてを又あつてをさふあ

あき。枕冊子十二世二
せはははあつてもあ

ゆゑへ 前夜をいづるいゑつる

異本堤中納言物語 夕べのいづるいゑつる
のめいんく〜〇

ゆゑき

宇教保あて言 去日宿の末に借入 申付のおと〜
のうらつき也まき〜てゆよのふ集る〇日花岡あ
やのゆゑき 湯槽のふいもまき。

ゆゑに努こ

栄花^{四下}山ゆゑきおい〜まを次〇日尼そそぬ夏あめ
におり〜ゆゑ〇源次女ゆゑきふ〜まらるる慶
おい〜まを〜ぬまきハ〇

ゆゑき

孫系良基公神業日記人のゆゑきもま〜
〜〇栄花^{こころぬ夏} せ六 ちゑし〜の〜おい
〜ゆし〇

ちやせ

栄花 蓮王夏 ちふとも 伊あやさなとつふの
てむあふい やまうりあを

ちで

栄花 ^{月宴} 九条よめやあしう 是せられてゆを
とつむておんあをれとてくまのきしあしを
くせもくふ 注に。袂衣 雪やまよ 何しとて
ぢやあしう 是ゆきもれとてつらつひれとて
○続詞花雑上 大喬院 四豆のやまをくふをまきあにて
あてくふをまきくし 中をまきとあてまきとまきし

もきくせりなまきは 喬院宰相

あしうのやまひもやまのあまのまきのまきと誰のい
返一 喬院

せしありとまきあしうのまきをまきまきのまきを
○栄花よめあしう 四風よあてまきまきまきのまきを
まきまきにゆちちまきまきあてまきまきまきのまきを
○同 後悔大将 あしうの例まきまきまきのまきを
まきまきまきのまきまきのまきまきのまきを
まきまきまきのまきまきのまきまきのまきを

四言

同 玉村 氣 ○ 齋 林
十 九

遊女

白女古今 ○ 檜牆姫後撰 ○ 宮木後拾 ○ 靡詞花 ○

戸千載 ○ 妙新古今 ○ 初若玉葉 ○ 白大和

○ 金古事記二 ○ 小觀童一 ○ 觀童古事記二

古事記二 ○ 香爐同 ○ 神崎君月古曾日 ○

池田宿遊君侍從此宿ノ長者 母湯谷二人ノ哥

アリ 盛衰記四十五 ○ 亀菊兼久記 ○ 阿古久曾詞

花 ○ 祇王祇女佛平家物語 ○ 少將曾我物

○ 江口尼撰集抄 ○ 小馬遊女記 ○ 主殿同 ○ 如

意日 ○ 孔雀日 ○ 三枝日 ○ 河孤姫日 ○ 孤蘇子

カ余小 ○ 中君日 ○ 土師万葉十八 ○ 蒲生日 ○

珠名日 ○ 狭古日 ○ 依支流口 ○ 香爐伊勢大 ○

児嶋万六 ○ 祇寿万代集 ○ 祇光東鑑 ○ 祇

寿後葉 ○ 力寿成表記七 ○ 妙日 ○ 嶋ノ千歳

若ノ前日 ○ 盛衰記十七 實ヤ祇ト云文字ヲ

ハカミトヨム也 神ハ人ニ翫ウヤマハル、上

ニ神ニハ人恐ル 下ナレハ吾ラモア正モノニ

セニトテ祇一祇ニ 祇三祇禍ナト名ヲ付ケル

コソヲカシケレ ○

あふせれ

山家集

アキサレ

夕せれや玉うさく家のあふせれ生のさきまのめえ 養うる
同下世 夕せれや〇拾玉三廿六夕せれ小〇同三八夕せれハハア

堀百箇

俊頼

支本ニ

源基綱

同廿八家の集

新古今

西行

ケニキトイ

フニ道ニ

却返りきせれ此の冥ゆるさ夕の浦か風
秋亭に夕せれのまれ霞ハ主増くなり
秋のまをいんるるにけしきり
夕せれの色

あふせれ

山家集

ついで山の岩屋夕をててさくらにさよの石のこもりなり

あふせれ

栄花若枝 中門のほとたにまつえつきてぬらるほとれと

〇月音楽 あのみぬきさるるものやもりてきさるらつと

してさくらちめうてい。

あふせれ 維摩會

○ 清少集 人のあまきまゝに大和へけんゆくとていひま

五言

ちうらむら 今俗畧してちうらと云

栄花 玉のうさり

いさぎの山

公任集 四葉。源朝貞。枕冊子。とてあまきまゝにちうらむらと云
○ 公任集 廿二。花鳥朝貞。花山殿。後涼殿。此

雪のつゆ
雪打りし
雪あてむ

前乃南此 つけあまきまゝにちうらむらと云 他文ありし

ハ小右記に ちうらむら 寛和元年 正月十日の事之

栄花 晚待星。公事根源。ゆき見参。拾遺雜々

雪を ちうらむら ちうらむら ちうらむら ちうらむら

消る ちうらむら ちうらむら 中務祝王具平

ちうらむら ちうらむら 雪のつゆの水のつゆりなりと云 乃ちちうらむらと云 此

○ 続古賀 ちうらむら ちうらむら ちうらむら ちうらむら

ちうらむら ちうらむら ちうらむら ちうらむら ちうらむら

ちうらむら ちうらむら 後朱雀院

天地も ちうらむら ちうらむら ちうらむら ちうらむら

○続拾冬 多山人正のつぼよ雪乃山ゆきて侍り
くく物々を侍りたる 周防内侍

あまのつらき雪のつらきして雪舟よつら山と成らん

○新後撰恋玉 雪乃山つらきまて云々 ○字致保橋上

○源浮舟 あゆみたるまての雪舟と云々

まゝい乃 厨まてまてまてあかりたる○

あはつつき 油器

字鏡

○和名

○新古恋玉 ちあつつきの水いさねのまてまて

如○のけろ日記

○源東屋 女君ハ

あまのつらきまてまて

湯桶ユトウまみ

続紙 江次第 四 ○続飯 江次第 ○続板ハ ○半尻シ

波部 ○士道 ○土間 ○分捕庭訓 ○透廊スウロウ

阿部 ○寂果サカ 五部 ○午本ウラ 天部 ○榎盤エノイタ 加部 ○足駄

阿部 ○青瓷アヲ 阿部 ○哥曲カク ○地敷 ○蚊帳カマド 加部

○野宿 ○節忌 ○朝坐 夕坐アサ 栄花エイカ ○繩ヒモ 纓ヒメ 奈部

○地摺チズリ 裳 ○平座ヒラ ○白鎧シラ 空カラ 極吹キョクフキ ○笥子ケコ 日ヒ あ

雪佛 ユキハツ

康資王母集おしり—む志の上文其ノヒりトアリ乃書と丈
六の仏めつ多りのまりく供養—つるしつん
まてかく

いこのつこの林の—あき—うしきくに新拾を名しありれ
はしほん

日をと—さの仏の信ねんとも子に特乃つまねやこし

○新拾遺釈教日 ○丈木世四釈教雪よと丈六の佛
と作りまりく供養はよと 膽西上人が同○

あふのむに

栄花九月妻ゆみけをさめ ありく—とつこ—きく○
竹取湯水の—きけ日—ふよ—あまし—なり○

あふりのほ

今俗湯アガリト云ニ同シ

袂衣ニ上十四 けあふりのほりく—うし—あま—あふ—は○

七言

あふのむに

あふましまし清心やありん。

よの部

二言

とまき 斧

後撰 恋六 とまき

あふましまし清心とありん

○ 和名

全葉 恋下

六帖
の 時 も

夜着 ヨキ

吉田鈴鹿家集記 宝徳元年四月九日花園殿ヨリ

小一

中畧 小夜着一ツ御本所へ参○

某ナニ々々

聖仁記二年条留連嶋浦 ○五六廿加我欲布夕

マヲトラスハヤマシ

散木九根解百首中

家集 上月秀菊

浦を似くハ何と志しぬあや月七すよふ志る菊乃を

異本拾玉俱舍宗

頼政集考山窓

枕冊子四十段 雪の山さて明りつゝいふとサヤ

今本ハ

ツタ
マカ
サカ
カ、ヨ
モコ

ツタヒトアリ活本
ニツタヨヒトアリ

よめ 夜目

活本之集

和泉式部集

天保京町さくらうりてる雪いと久あき月とをこる

○棠花弱々女房のふり袖口板のトさゆく○

よる 夜居

源若菜

下 〇後拾離三後朱雀院の清時に年比

僧

のよひはあつしん。

あつしん ありはしん ありはしん ありはしん

五十四
よりのあつしん ありはしん ありはしん ありはしん

保憲女集 夜間

保憲女集

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

○

よひる 霄居

源下景

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

○月未

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

和泉武部集

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

○

とほろ

和名 和名 和名

○栄花月真あつしん

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

あつしんのあつしん ありはしんのありはしん

鏡

○宇敷保橋止 四くしよほん 色之

○栄花 きよもり 今年ハ八小あををひる陽

くし 八くしほんをりそ ○武烈記 男_ホ丁

全賢

藤原公経の伝

みづき

しよのをふりわんとうやすはハハの里へ移るひるり

夫本一天徳三年四月庚申夜奇合 藤原公経

君代ハハの里人ナリしと云ふありき 仰るみ 多葉とてつじ

顯補集

○ 八くしよのをふりわん 一おなれをなすありあへにあやまの

舞

とほ海 隔夜

新六一よりなつてあふ

六帖

ともしや

保憲 女集

○ ふみぬくはなをよまはたにぬい雲のほろをい

四言

とありき

栄花鳥道望 うちとこしとありきれおとら 一十_ホ 〇日_日

四とありきとちとち 一わらみ 一とちとちとち

とうりせり 夕。夜

催馬楽刺櫛 安之奈止利と宇厄利止利 夕朝取也
○せりし せりしりのいり。

とけり 世談

栄花 月宴 とけりしに ぬりきりし。

とけりし

下葉

林葉三月送行客

とくは

拾玉早

○ 甜きものさるのあはまきせにりてせにきりあはせぬらん

とくは

河を秋 羽袖

○ 二の川よこしまさやせろしりあはせぬらん

○

あはせぬらん

とくせう

生ナキコモルヲ云

深徳角 何れもしんまふりつるんとしての大鏡一
陽成 いろよふいせり〜おろし〜る時
糸

よりれま 俗ニヨウテモナヒト云々云

拾遺外

年と〜しゆま杖のふまに〜てぬまのまげう〜
○浪雲一〜しゆまやうにぬれ〜心四ら〜れ〜
つ保芳と〜ぬ〜。

とせしる

続世継 まゝを承のまゝ

とゆり〜は ○アツカリ物ノ証文ト
聞工傍例存ヘシ

くらみけき

ユタケキ

源上源上 何エ〜むねのちと〜

は〜きに孟 ちめて〜〜〜

んこの月最勝王経金剛般若寿命経れ〜
るなま〜の〜の孟〜けき〜
今の〜き〜

——くけりて後云々○山家下世風好ひて云々
ス——成る花○淡松三より——のゆるり
ゆるり○

くらぼろ

拾玉四十 くらぼろむらて○

五言

よきこのいの
去依日記下
むら舟のつれてのあまのいそがしき
のまてしるいそがしき

○四五十日
ト云々云々

くの海 四海

後拾遺序 くの海○紫集と七乃海

ヨモノ海

世のくあは

栄花楚王夏 世のくあはておのり
あはておのり 同日根合
あはておのり 同日根合
あはておのり 同日根合

このむきさ、 井のむきさよりたぬ

栄花 えいげ このむきさよりたぬ

をむきさ まふまふ 由部

をりあくる ヨリアケル 礎楊之の声ニイヘリ今イフカキリコエ
ヲ出ストイフニナルヘシ

長明無名上 ちやうめいむなむね 声とをりあけぬ

新六

をりあくる

栄花 峯の月 えいげ 声とをりあけぬ

六言

をりあくる

格玉四 平三 法華經勸発品 法のをと佛のまに つきふとくをりあくるにむきさ入る

をりあくる

よはあつらひ

栄花 月婁 みのときさまのつらあつらひのほと
いとをかしう。

よもさのあと 冬痕

ヨモキノセキ

隆信集 恋六 さいふあつらひのほと
に又ふの女もあつらひのほと
朝露れあつらひのほと 秋風よもさあつらひのほと

ほし

みきまのほし さいふあつらひのほと
夫本廿八 為家
まほし ぬさあつらひのほと
千五百番 寂蓮
みきまのほし さいふあつらひのほと

○今物語云 大浦 入道とさきまのほし さいふあつらひのほと 中界風地

けきてあつらひのほと さいふあつらひのほと さいふあつらひのほと
年々も風のほし さいふあつらひのほと

さいふあつらひ

さいふあつらひのほと さいふあつらひのほと
さいふあつらひのほと さいふあつらひのほと

